

複数テキストを通して概念を捉える

—小学5年生戦争文学の授業構想—

藤 枝 真 奈

- 1 問題の所在と研究の目的
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 問題の所在
 - 1.3 学習指導要領における本研究の位置付け
 - 1.4 お茶小の国語科教育における本研究の位置付け
- 2 概念を捉える学びに関する議論の概要
- 3 複数テキストの読みに関する議論の概要
 - 3.1 複数テキストの読みに関する議論の概要
 - 3.2 間テキスト性
- 4 小学校国語文学の読みにおいて複数テキストを通して概念を捉える
- 5 授業の構想
 - 5.1 授業の構想
 - 5.2 学びの見通し
 - 5.3 使用する複数テキスト
- 6 考察と今後の課題
 - 6.1 考察
 - 6.2 今後の課題

引用文献

参考文献

1 問題の所在と研究の目的

1.1 研究の目的

本稿の目的は、複数テキストを通して概念を捉えることの文献研究を行い、授業の構想を行うことである。

1.2 問題の所在

今日、文学を読む意味とは何か、そして、教室で文学を読む意味とは何かという問いが提示されている。住田(2020)は、この問題を考えるにあたって、「文学テキストとの出会いによってこそひらかれていく学習者の社会的問題解決のすがたを構想してみること。すなわち「文学言語に固有の(社会参加とそれによる自己実現のための)資質能力」を具体的に構想すること」を提案している。

概念型カリキュラムを構想し、複数のテキストに書かれている形象と形象を受け止めて、抽象的な概念について考える授業設計を行うことで、この課題を考えていきたい。

1.3 学習指導要領における本研究の位置付け

平成29年告示の学習指導要領においては、複数テキストについて、どのような言及があるだろうか。

まず、改訂の要点の一つとして、小中学校における全国学力・学習状況調査等の結果を受けて、小学校では複数の情報を関連付けて理解を深めること、中学校では複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすることがそれぞれ課題として挙げられている。

それを受けて、学習指導要領においては、小学校5・6年生の知識および技能の(2)情報の扱い方に関する事項のうち、情報の整理の項目で、「イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。」とされ、情報と情報との関係付けの仕方の例として、「複雑な事柄などを分解して捉えたり、多様な内容や別々の要素などをまとめたり、類似する点を基にして他のことを類推したり、一定のきまりを基に順序立てて系統化したりすることなど」が挙げられている。

また、読むこと(2)ウ 学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する活動においては、「本や新聞など複数の資料を活用しながら、調べたり考えたりしたことを報告する言語活動を例示している。複数の本や新聞などとは、同じテーマについて異なる書き手による本や文章、異なる新聞社による新聞記事などが挙げられる。本や新聞のほかに、雑誌、インターネットから得た情報などを活用することも考えられる。調べたり考えたりしたことを報告するとは、複数の本や新聞などに書かれていることを比較、分類、関係付けるなどして分かったことと、それらを基に考えたことをまとめて、文章に書いたり発表したりすることである。」とされている。

一方で、文学的文章を読むことに関しては、小学校5・6年生の読むことの精査・解釈(文学的文章)エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることにおいては、「登場人物の人物像を具体的に想像するためには、登場人物の行動や会話、様子などを表している複数の叙述を結び付け、それらを基に性格や考え方などを総合して判断することが必要である。」と、一つのテキスト内での複数の叙述を表すものにとどまっている。

1.4 お茶小の国語科教育における本研究の位置付け

お茶の水女子大学附属小学校(以下、お茶小)では、異質性を認め合う多元的共生社会を形成する民主主義を理念とし、そのような社会を担う主体的な市民の育成を目指して研究に取り組んでいる。(お茶小・お茶の水児童教育研究会(2021))そこでは、対話を通じた協働的で主体的な学びが大切にされている。

具体的には、お茶小の新教科「てつがく」および、「てつがく創造活動」においては、日常で自明とされていたことをあらためて問うことを対話で行ってきた。また、国語の学びに関しては、サークル対話と共同推敲(藤枝(2018))、文学対話(藤枝(2020))、ワークショップ型の学び(岡田(2018))などが

行われている。教室空間が、子どもたちの幅の広い表現を引き出しつつ、子どもたちが相互に学び合い、高め合っていく場であることをめざしている。

これらのことは、本質的な問いを立て、永続的な理解を探究的に考えることが求められる概念を捉える学びとつながっていると見えよう。

2 概念を捉える学びに関する議論の概要

「理解をもたらすカリキュラム設計」は、様々なプログラムやアプローチの中で使われている。日本では、近年、国際バカロレア (IB) のカリキュラム設計の基本として、頻繁に紹介されるようになった。

概念型カリキュラムを用いた授業設計においては、「生徒は何を理解するようになるべきか。」「何がそのような理解の証拠と見なされるだろうか。」という問いからカリキュラムを設計し、概念を捉える学びを行うことによって、他の事柄に転移可能な理解をもたらすことを目指している。(Wiggins & McTighe (2005)) トピック、事実、スキルを最終目標ではなく、支援ツールとして使用し、概念、一般化、原理に向けて帰納的に指導する。(Erickson, Lanning & French (2017))

Erickson, Lanning & French (同) は、概念的思考を次のように説明している。「概念的思考には、事実情報を批判的に検証する能力、新しい学習を既存の知識に関連づける能力、パターンとつながりを見出す能力、概念レベルで重要な理解を引き出す能力、エビデンスに基づいて理解の真実性を評価する能力、理解を時または状況を超えて転移させる能力、そして概念理解を想像力豊かに利用して問題を解決し、新しいプロダクト、プロセス、またはアイデアを発明する能力が必要とされる。」このような概念的思考が発揮される手段についても、発達段階に合わせて、検討が必要である。

3 複数テキストの読みに関する議論の概要

3.1 複数テキストの読みに関する議論の概要

複数型テキストは、連続型 (文と段落から構成)、非連続型 (図・グラフ、表・マトリクスなど)、混成型 (連続型テキストと非連続型テキストの組み合わせ)、複合型 (ウェブサイトの情報のように、独立したテキスト・データを組み合わせたもの) に分類される。(中村 (2019))

小林敬一 (2010) は、複数テキストの情報を読み手が統合することを、相補的統合と批判的統合の2つの種類に分けている。相補的統合とは、複数テキストの情報を相互に補い合うことによる統合である。批判的統合とは、「複数テキストを批判的に吟味し関連づけながら、それらのテキストに描かれた事象を推理したり論点に関して判断を下したりする過程とその所産」(小林, 同) である。

複数テキストの批判的統合におけるテキスト評価としては、学習者による取捨選択と重み付けが挙げられる。取捨選択とは、例えば、検索してヒットした中から、使えるものとそうでないものをより分けることである。重み付けとは、「信頼性や有用性、論拠の確かさ、テキストから推測される書き手の信念や意図、動機、立場などに照らして、各テキスト内容に留保をつけたり、割り引いて考えたり、順位づけしたりすること」(小林 (同)) である。

また、複数テキストの批判的統合におけるテキスト評価として、Wineburg (1991) は、歴史家の方略から次の3つを挙げた。

- ①出所参照 誰がいつどこで何に書いたかを知ること、テキストの狙い、信頼性、正確さなどを判断する。
- ②裏付け あるテキストの内容を他のテキストと突き合わせ、その裏をとる。
- ③文脈化 テキストの記述内容を時空間的文脈の中に位置づける方略

そして、高校生がこの3つの方略をほとんど用いないことを明らかにし、歴史学の実践と高校までの歴史教育における乖離が方略利用の差として現れることを示唆した。

Hofer (2001) の研究から、人は通常、知識や知ること自体について何らかの信念 (個人的認識論) を抱いていること、またそれが思考や判断、知識獲得に影響を及ぼすことが知られている。小林 (同) は

複数テキストを通して概念を捉える

そのことが批判的統合においてもあてはまることを指摘している。

これらのことから。既存の知識や信念があることを前提にしつつ、複数テキストの批判的統合をもたらす学習を行っていくには、既存の知識や信念を問い直す働きかけが必要になってくるであろう。

3.2 間テキスト性

複数テキストを扱うにあたって、テキストとテキストとを関連づけるリテラシーとして、間テキスト性に注目する。

クリステヴァ（1969）は、バフチンの対話原理を間テキスト性へと発展させ、次のように説明した。「『文学の言葉』はひとつの点（固定した意味）ではなくて、いくつものテキストの表面の交錯、いくつもの文章エクリチュールが、すなわち作家、受け手（すなわち登場人物）、当時のあるいは先行する文化のコンテキストが交わす対話となる。」

やまだ（2008）は、バフチン後期にみられる人間も「テキスト」という概念で考えられている「テキスト間の対話」の概念、そして、バフチンの対話原理を発展させ「差異化、生成、多様化が生成されるプロセスとしての対話」を重視した、クリステヴァの「間テキスト性」を検討し、「多声テキスト間の生成的対話」概念を、ネットワークモデル（生成的網目モデル）に位置づけた。このモデルは、ドゥルーズ&ガタリ（1980）のリゾームとも意味を同じくする。

ここでは、「対話」の概念が、伝統的なツリーモデルにおける「対話」とは異なる。やまだ（同）は次のように述べている。「『多声テキスト間の生成的対話』である。対話概念そのものがポリロギ的に大きく変質しているのである。人間もテキストの一種といえるが、生きたテキストである。つまり、動くテキスト、移動するテキスト、生成するテキストである。したがって、本来的に名詞形ではなく、動詞形であらわされる。多声テキスト間では、たえまなく「対話」が行われる。ネットワークモデルでは、「むすび」が重要な働きをもつ。「自己」とは、実体的な同一性をもつ事物ではなく、物語的に組織される「有機的に組織された結び目（中核）としての生きたまとまり」であろう。」

複数のテキストを用いることで問いが生まれ、教室での対話によって学びが広がり深まることが期待される。

4 小学校国語文学の読みにおいて複数テキストを通して概念を捉える

複数テキストを用いた学習は、小学校の国語科学習において、これまでも多数行われてきた。複数の説明的文章の比べ読み、易しい短文の構造を読み取ることで難しい長文の構造を読み取る、同じ作者の物語文の平行読書、などが挙げられる。

これらの先行実践と、今回構想する実践が異なるのは、概念を捉える学びを行うことによって、他の事柄に転移可能な理解をもたらすことを構想している点である。また、個々人が既存の知識や信念をもつことを前提にしつつ、それらを問い直すきっかけがあるように、単元を構成する。そうすることで、テキストとテキストの間に個人の読みが新たになる学びを創っていく。

5 授業の構想

5.1 授業の構想

概念型カリキュラムを用いた授業設計の方法を援用し、複数テキストを通して概念を捉える単元を構想した。

5.1.1 単元名 他者の靴を履く

5.1.2 単元について

○単元のねらい

第二次世界大戦・太平洋戦争が終わって、76年経った。学校では、戦争を実際に体験した人が身近

にはいない子の方が多くなってきた。戦争はいけないこととは頭では思うけれども、「戦争は遠くの国のこと。」「かわいそうだね。」「今の生活ではあり得ないこと。」と悪気こそないのであるがどこか他人事である。

他者の靴を履いて、広島原爆について考える。他者の感情や経験などを理解する能力であるエンパシーにはもう一つの側面があり、ブルーム（2016）は、エンパシーという名の「気持ちの分かち合い」は特定の個人に焦点を当てすぎて、社会全体が良い方向に進む改革を実現するにあたっての障害にしかならないと指摘する。「平和は大切」だけで終わる学習はブルームの指摘するエンパシーの欠点に陥っている。

「戦争は悲惨だから平和は大切」という一つの解だけを目指すことは、表面的な学びに満足する危険をはらみ、また、自分ではない誰かを悪者にし、自分を善き者にとどめておくことになりかねない。「平和は大切」で終わりにしない、その先を考え続ける学びを模索することで、戦争文学の語り方とその課題（被害者性、内なる差別、世代格差、悲しみ）（疋田（2010））を超えた学びが生まれるのではないだろうか。

○国語としての単元の目標

- ・登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉える。
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。
- ・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる。

単元名		学年
他者の靴を履く		小学校5年生
重要概念	関連概念	グローバルな文脈
記憶	受け手側の受容、間テクスト性	アイデンティティーと関係性
探求テーマ（概念理解）		
人は言葉で記憶を継承し、アイデンティティーを更新する。		
探求の問い		
事実的問い：登場人物の変化はどのように書かれているか。 概念的問い：忘れないということは何をもちたらすのか。 議論的問い：ずっと忘れないでいたら、世界中のだれも、二度とおなじような目にあわないですむのか。		
評価のための課題と評価基準		
・登場人物の変化の原因・過程・結果をまとめる。（A分析 B構成 C言語の使用） ・記憶に残しておきたいことを手紙やポスターに書き伝える。（C 創作）		
Approach to Learning (ATL) 学習の方法		
協働スキル：他者の考えを聴き、対話する。 コミュニケーションスキル：考えをまとめ、伝えたい人に手紙を書く。		
学習者像		
心を開く人：歴史や社会の事実を受け止め、記憶を継承する。		

評価

- ・登場人物の変化の原因・過程・結果をまとめる。（A分析 B構成 D言語の使用）
- ・記憶に残しておきたいことを手紙で書き伝える。（C創作）

A分析 登場人物の変化や表現の効果について述べている。

B構成 意図に応じて考えたことなどから書くことを選び、構成や展開を考えている。

C創作 学んだことを基に、自分ならではの考えに至っている。

D言語の使用 表記と文法を理解し、相手に合わせた語彙の選択をしている。

複数テキストを通して概念を捉える

5.2 学びの見直し

5.2.1. 本単元に至るまでの学び

○子どもたちの実態

3年生で『ちいちゃんのかげおくり』、4年生で『一つの花』を読んだ。また、卒業生の方に疎開生活の話をお聴きすることで、太平洋戦争中の子どもたちの暮らしや思いを知る経験をしてきた。

一方、広島または長崎の原爆について、実際に現地を訪れたり被爆者の方の話をお聞いたりした経験は、クラスに数人ずつである。

○事前の調べ学習

事前に、「広島市の原爆について、本や映像などの資料にあたり、事実と人々の思いをメモしてくる。」という夏休みの課題を出した。各自の関心に合わせ、本、新聞、映像、インターネットなどにあたり、事実を整理し、人々の思いを読み取ってきた。

5.2.2. 本単元の学びの見直し

実施期間 11時間

	時	主な学習活動
0次	0時	(夏休みの課題) 広島市の原爆についての本、新聞記事、ニュースなどから1つ選んで、人々の思いと事実に分けて国語帳にメモする。
1次	1時	夏休みに読んだり調べたりしてきたことのうち、心に残っていることを共有する。 単元全体の問いを立てる。 家庭学習 えらぶ 付け加えて読む本のリストから選び、読書を進める。
2次	2～5時	2時 『たずねびと』を読み、問いを立てる。 3・4・5・6・7時 『たずねびと』を読み深める。 原爆資料館ウェブサイトの映像資料の視聴 高蔵信子(かたくらあきこ)さんの証言 『平和のバトン』黒焦げのお弁当箱 『美しきものを咎め給うな』米田栄作 峠三吉『原爆詩集』序詩
3次	7～9時	7・8・9時 単元全体の問いから「てつがく(文学)対話」を行う。 『ある晴れた夏の朝』 川崎哲『核兵器禁止条約ってなんだろう』、『核兵器はなくせる』 朝日新聞いちからわかる「グローバルヒバクシャ」
4次	9～11時	9・10・11時 学んだことや調べたこと読書から得たものから、記憶に残しておきたい、伝えたいと思う事柄を手紙に書き、伝えたい相手に送る。

5.3 使用する複数テキスト

本単元では、複数の連続型テキスト、混成型テキスト、映像を教材として用いた。

〈この単元で教師から授業内で提示したテキストの分類と内容〉

テキスト名、教材名	分類	内容
朽木祥『たずねびと』 【中心となるテキスト】	連続型テキスト(物語)	現代に生きる11才の少女が、自分と同じ名前の女の子を原爆供養者塔納骨者名簿の中に見つけ、広島市の原爆について知っていく。
原爆資料館ウェブサイトの映像資料 高蔵信子(かたくらあきこ)さんの証言	映像(インタビュー)	1945年8月6日に爆心地に近い職場で被爆した経験を語る。
弓狩匡純『平和のバトン』	連続型テキスト(物語)	黒焦げのお弁当箱の持ち主の遺族がどのよう

		にお弁当箱を発見したか。
米田栄作『美しきものを咎め給うな』	連続型テキスト（詩）	広島原爆で我が子を亡くした詩人が7年後の広島を題材に祈りを綴る。
峠三吉『原爆詩集』序詩	連続型テキスト（詩）	広島原爆で命と尊厳を失ったことへの怒り。
小手鞠り『ある晴れた夏の朝』	連続型テキスト（物語）	アメリカの高校生がディベートで「広島への原爆投下は正しかったか」を議論する。
川崎哲『核兵器禁止条約ってなんだろう』	混成型テキスト（解説，図，グラフ）	現在の核兵器とそれをめぐる状況を、解説，図，グラフで示す。

6 考察と今後の課題

6.1 考察

概念型カリキュラムを用いた授業設計の方法を援用し、複数テキストを通して概念を捉える単元を構想した。「平和は大切」だけで終わりにしない、その先を考え続ける学びを模索し、戦争文学の語り方とその課題を超えた学びを創っていききたい。

複数のテキストを使って、書かれている形象と形象を受け止めて、抽象的な概念について考える学びを重ねていく中で、環境を整えながら、子どもたちから概念に関連する問いが出てくることを待つつもりである。

6.2 今後の課題

- (1) 複数テキストを用いたことと、子どもたちの読みの深まりとの関連をどのように示せるか。
- (2) 概念理解につながる問いを子どもたちから出せるか。

引用文献

- 岡田博元（2018）「リーディングワークショップにおける「ことば」の獲得」全国大学国語教育学会国語科研究：大会研究発表要旨集 pp. 317-320
- お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会（2021）「学びをあむ一新領域「てつがく」第83回教育実践指導研究会発表要項 pp. 7-14
- 小林敬一（2010）「複数テキストの批判的統合」『教育心理学研究』58号 pp. 503-516
- 住田勝（2020）「物語る力」を育てる—文学的問題解決に資する資質・能力の構想」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第87集 pp. 8-10
- 中村光伴（2019）「複数テキストの読み」日本読書学会『読書教育の未来』ひつじ書房 pp. 121-132
- 中村純子（2019）『「探究」と「概念」で学びが変わる！ 中学校国語科 国際バカロレアの授業作り』明治図書出版
- 疋田雅昭（2010）「戦争の語り方を考える」
[http://masaakihikita.art.coocan.jp/class/\(34\)sensou.pdf](http://masaakihikita.art.coocan.jp/class/(34)sensou.pdf)（2021/12/27閲覧）
- 藤枝真奈（2018）「ことばへの意識を育むサークル対話と共同推敲の実践の一考察」お茶の水女子大学附属小学校 研究紀要 pp. 67-79
- 藤枝真奈（2020）「対話を通して、読みを深め合う—『おにたのぼうし』文学対話の実践を通して—」東京学芸大学国語教育学会研究紀要 16巻 pp. 73-81
- 文部科学省（2017）『小学校指導要領（平成29年告示）解説 国語編』
- やまだようこ（2008）「多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル—「対話的モデル生成法」の理論的基礎」『質的心理学研究』No. 7 pp. 21-42

複数テキストを通して概念を捉える

- Bloom, Paul (2016) *Against Empathy: The Case for Rational Compassion* (2018) 『反共感論』白揚社
- Deleuze, G., & Guattari, F. (1980) *Mill plateaux*, Les Éditions de Minuit ドゥルーズ, G., & ガタリ, F. (1994) 『千のプラトー～資本主義と分裂症』河出書房新社
- Erickson, H. Lynn, Lanning, Lois A., & French, Rachel (2017) *Concept-Based Curriculum and Instruction for the Thinking Classroom (Second Edition)*, エリクソン, H. リン, ラニング, ロイス・A & フレンチ, レイチェル (2020) 『思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践—不確実な時代を生き抜く力』北大路書房
- Hofer, Barbara K. (2001) *Personal Epistemology Research: Implications for Learning and Teaching*, *Journal of Educational Psychology Review*, Vol.13, No.4, December
- Kristeva, J. (1969) *Semeiotiche: recherches pour une semanalyse*
Editions du Seuil クリステヴァ, J. (1983) 『記号の解体学 セメイオチケ1』せりか書房
- Wiggins, Grant & McTighe, Jay (2005) *Understanding by Design, Expanded 2nd Edition*, Association for Supervision and Curriculum Development (ASCD) ウィギンズ, G. & マクタイ, J. (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』日本標準
- Wineburg, Samuel S. (1991) *Historical Problem Solving: A Study of the Cognitive Process Used in the Evaluation of Documentary and Pictorial Evidence*

学習で使用した資料一覧

- 朝日新聞 (2020) 『知る 原爆』朝日新聞社
- 朝日新聞 「グローバルヒバクシャ 最近よく聞くね」 2021年9月16日朝刊
- 川崎哲 (2021) 『核兵器禁止条約ってなんだろう』旬報社
- 川崎哲 (2018) 『核兵器はなくせる』岩波ジュニア新書 岩波書店
- 原爆資料館ウェブサイト <http://a-bombdb.pcf.city.hiroshima.jp/pdbj/detail/206918> (2021.9閲覧)
- 小手鞠るい (2018) 『ある晴れた夏の朝』偕成社
- 指田和 (2019) 『ヒロシマ消えた家族』ポプラ社
- 峠三吉 『原爆詩集』序詩
- モーパージュ (2011) 『戦火の馬』評論社
- 弓狩匡純 (2019) 『平和のバトン』くもん出版
- 米田栄作 「美しきものを咎め給うな」